

【親鸞部門（中学生）・最優秀賞】

想像と創造

宮城県仙台二華中学校 第3学年 高橋 怜楽

蛇と亀と象が大地を支えている。天文台で私の目を引いたのは、天体望遠鏡でもプラネタリウムでもなく、古代インドの人々が想像した「世界」の模型だった。

現在は昔とは違い、地球が丸くて青いことは常識になっている。しかし、「世界」と聞いて思い浮かぶのは十人十色だろう。古代の人々のように、蛇と亀と象を想像する人もいるかもしれない。私が「世界」と聞いて想像するのは、パズルだ。いびつな形をしたピースが組み合わさって、球体を創っている。何一つとして同じ形のピースはない。互いに支え合いながら、世界は構成されている。

私はモダンバレエを習っている。踊ることは私の生きがいだ。舞台上立っている間、ダンサーはなににでもなれる。鳥にも、獣にも、精霊にも、自分と違う別の人にも。舞台を創るということは、世界を創造するようなものだと思はれる。それは、海原に漕ぎ出すような大胆な行為でもあり、毎日花に水をやるような繊細な作業でもある。お客様が見るのはダンサーだけだが、その作業は決してダンサーだけで行っているわけではない。先生、衣装さん、照明さん、音響さん、舞台監督さん、メイクさん……。挙げ始めたらきりがない。その中の、一人でも欠けると舞台は完成しない。なぜなら、誰一人として同じ人はいないからだ。百パーセント同じ考えの人はいない上、今まで目にしてきたものも皆違う。

私にはそれが、とても素晴らしいことに思えるのだ。全く違う人たちが、一つのものを作り上げようと互いに支え合っていることが。

考えてみると、それは舞台に限ったことではない。この「地球」という大きな枠でも全く同じことが起こっている。「私」や「あなた」というピースが誰かの毎日を創っている。

それは、誰かに常に支えられているということである。「世界」を「そうぞう」するとき、私は感謝を思い出す。